

人は他の動物と比べて老後が際立って長い。肉体的損傷が各所に出現しても生きていられるのは、人間と人間が飼っている動物だけである。

動物にはそれぞれの最大寿命がある。

大きな動物ほど長生きである。ゾウは70年、カバは60年。犬や猫は20年から10年である。ネズミの最大寿命はたかだか2、3年である。昆虫は数カ月であり、シヨウジョウバエは数週間の命である。

小さな生き物は長く生きられない。

人間はカバより小さいがカバより長生きで最大寿命は120歳くらいである。

何故か？ 人は他の動物に比べて並はずれて頭脳が優秀だからである、と考えられている。

カバより長生きしたかったらカバより多くの教養を持つていなければならぬ。

超ベストセラー作家であった『頭の体操』シリーズで有名な心理学者の多湖輝は、「楽老」を送るためには「きょうようと、きょういぐが必要である」と言った。私が思うに老人は二つのタイプに分類される。

①やりたいことがある老人

フランスの歴史家であるジュールジュ・ミノワは、「老いの歴史」(1996)の中で書

いている。老いのもつ本質的な特性として

「成人として成功をおさめるためには、従うべき制約がたくさんあるが、老人は年齢を理由にそれらを気にする必要がない。制約から解放された老人は、自らの想像力を開花させることができる。それゆえ、70歳あるいは80歳で才能を表す者も歴史の中にはいたのである」

教養があるヒトにとって老後が長いことは悪いことではない。年を重ねても肉体の損傷がなければなおよい。教養を身につければ最大寿命を超える可能性もある。そして、やがて年寄りばかりの社会になれば差別されることもない。

久しぶりに会った秋田県育ちの友人が東北弁で「シンシユウへ行つてスシをやつてきた」と言った。私は「信州へ行つて寿司を食つてきた」のか？と思つた。

聞き返すと「スイスへ行つてスキーをやつてきた」ということであつた。

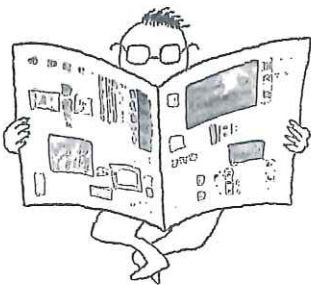
私たちは数年

前に国立大学を定年で退職した仲間である。

②やりたいことがない老人

多湖輝先生が言つた楽老を送るために必要な「きょうようと

きょういぐ」は、「教養と教育」ではなかつた。先生が言いたがつたのは、「今日用事があつて、今日行く所がある」ということだそ



七九

これは今野浩の書いた「工学部ヒラノ教授の事件ファイル」のあとがきに書いてあつた。定年退職した別の友人からの年賀状には次のように書いてあつた。

「のんびり過すのはセカセカ過すよりも難しいですね」